

「努力したこと」についての回想的記述の分析：日米中比較

清泉女学院大学 高 崎 文 子
清泉女学院大学 東 洋

Analysis of Retrospective Description of “Efforts”: Comparison among Japan, the United States and China

SEISEN JOGAKUIN College TAKASAKI Fumiko
SEISEN JOGAKUIN College AZUMA Hiroshi

本発表では、「過去に努力したこと」についての記述データをもとに、日本・米国・中国の3カ国における、記述の内容や様式（スタイル）の特徴について検討を行った。

その結果、記述内容については、活動内容と何に動機づけられているかという点において、3カ国それぞれに特徴があることが明らかとなった。さらに記述様式については、日本は目標を重視し、中国はプロセスを重視し、米国は結果を重視するという特徴が明らかとなった。

【キーワード】 努力したこと, 記述の内容, 記述の様式, 日米中比較

In this study, it was examined how cultural differences among Japan, the United States and China are related to the contents of narrative and the characteristics of styles based on descriptive data about “efforts in the past.”

As a result, the comparison of the characteristics of the contents, students from three countries showed different feature each other, though in the comparison of the characteristics of forms, Japan and China showed similar feature while the US showed difference.

【Key words】 description of effort, contents of descriptions, styles of descriptions, comparison among Japan, the United States and China

はじめに

人は、あるテーマについての記述を求められた時、それがどのような事柄であり、どのように記述すべきか、という判断をした上で、情報を選択して表現すると考えられる。

たとえば「努力」についての記述を求められた時、テレビゲームに何時間も集中し、そのゲームの最終目標に到達したからといって、「努力」したということはあまりないだろう。しかし何時間も集中して勉強し、試験で合格点を取った場合は、その行為を「努力」として表現することに躊躇しないのではないだろうか。

つまり私たちは、どのような事柄が「努力」として記述するに値するのか、また「努力」を表現するためにどのような情報を伝えるべきか、などについての判断に関連した認知的な枠組みを持っていると考えられる。

この認知的枠組みは個々人が持っているものではあるが、その個人が属する社会や文化、行為を行う文脈における価値判断の影響を受けると考えられる。東（1997）は、人々が判断や行為を行う上で影響をうけるような、社会的・文化的に共有されている認知的枠組みを「文化的スクリプト」と呼んでいる。東（1997）によると、人は社会的・文化的経験を通じて、出来事が一般的にどのように発生し、経過し、結末を迎えるのか、という知識を獲得する。これらの知識はスクリプトとして定着し、出来事の解釈や評価、予測や行動の選択基準として参照されるようになる。同じ社会制度や文化を共有する集団では、経験や文化刺激を共有すると考えられるため、個々の人の持つスクリプトのレパトリーも類似してくると考えられる（東、1999）。

以上をふまえて、高崎ら（2006）は、「努力したこと」についての自由記述の特徴から、日本と中国におけるスクリプトの特徴について検討した。その結果、努力したこととして記述された内容については、学生では2国間の違いが顕著であったが、親世代では2国間の違いはほとんどないことが分かった。また、努力したことの記述の様式については、2国間・2世代の4グループの間に違いはあまり見られなかった。以上のことから、努力の内容については、「努力すべき行為」の選択の時点で文化的スクリプトが影響していることを示しており、努力の記述様式については、「努力として表現すべきこと」についての文化的スクリプトを反映しているのではないかと考えられた。

しかし2国間での比較について東（2005）は、相違は注目されるが共通点は押さえられないということと、2つの文化を両極とした二分法的認識をもたらしやすいということを指摘している。日本と中国の「努力」スクリプトの特徴が、それぞれの独自性を持った異なる傾向を表しているといえるのか、あるいは相対的には類似した傾向を持つと考えられるかについては、もう1つの視点を加え、3カ国間で比較検討することが有効であろう（東、2005）。

以上のことから本研究では、「努力」スクリプトの特徴をより相対的にとらえるため、日米中3カ国のデータを用いて比較検討し、それぞれの相違点や共通点を明らかにすることを目的とした。

目 的

日本、中国、米国において収集した「努力したこと」についての自由記述データから、各国における「努力」スクリプトの特徴について比較検討する。

方 法

1. 調査協力者

中国サンプル：北京にある2つの大学の学生 計83名

日本サンプル：首都圏の国立大学1校、首都圏の私立大学4校、地方国立大学1校の大学生

計 244 名

米国サンプル：西海岸にある州立大学 1 校，私立大学 1 校の大学生 計 60 名

2. 調査内容

「努力したこと」について，自由記述による回答を求めた。教示文は以下のようなものであった。

「ここ 1，2 年ほどの間に，はっきりとした目的をもってそれを達成するために一生懸命努力したことを，2，3 思い出してください。そしてそれについて，何をしたか，なぜそのことをしたのか，またその時の気持ちはどうだったか，なるべく詳しく具体的に書いてください。」

エピソードを回想する期間については，日本の調査では「ここ 1，2 年ほどの間に」，中国の調査では「ここ 1 年ほどの間に」，米国の調査では「ここ数ヶ月の間に」という教示が行われた。回想期間を同一に設定しなかったのは，予備調査の結果，エピソード想起の容易さやエピソード数などが 3 カ国で異なったため，同程度の記述が得られるよう調整を行ったためであった。

3. 分析に用いたデータについて

日本と中国データは，2004 年から 2005 年にかけて調査を行い 2 国間比較の分析（高崎ら，2006）をしたデータを用いた。また，米国データについては，真島らが 1996 年から 1997 年にかけて米国で行った調査のデータ（真島ら，1998）を用いた。

結 果

1. コーディング

高崎ら（2006）の研究で用いられたコーディングカテゴリーにそって，自由記述の内容の分類を行った（表 1 参照）。用意されたカテゴリーに該当した内容が記述されていた場合「1」を，内容に該当しなかった場合「0」を割り当てた。

コーディングは，それぞれの言語（日本語，中国語，英語）から直接行い，日本語データについては日本人が，中国語データについては中国人が，米国のデータについては米国で 4 年以上生活した経験を持つ日本人が担当した。コーディングの担当者は，実施前に十分な説明と訓練を受けた。

表 1. コーディングカテゴリーの内容

大カテゴリー	下位カテゴリー	内 容
活動内容	学業	受験, 試験勉強, 資格取得のための勉強など
	アルバイト/仕事	アルバイトや仕事
	クラブ活動/趣味	サークル活動, 趣味, ボランティア, 旅行など
	進路	就職活動, インターンシップなど
	対人関係	友人, 恋人, 仲間, 家族などとの人間関係
	身の回り/生活	家事などの日常生活の中での活動
	その他	上記以外のもの
誰のため	自分	自分のため
	家族	家族のため
	友人	友人のため
	所属集団	クラス, サークル, 職場, 国のためなど
	その他	上記以外のもの
何のため	達成/競争	何かを成し遂げる, 優勝を目指す, 合格するなど
	内発的	活動の楽しさ, 興味, 自分にとって価値があるなど
	義務/役割	部長として, 親だからなど
	報酬/罰	お金を稼ぐため, 単位を落とさないためなど
	その他	上記以外のもの
目標	明確な記述	大学に合格する, など
	漠然とした記述	たくさん勉強する, など
	記述なし	目標についての記述がない場合/上記以外は必ず
結果	結果についての記述	努力した結果について明記してある
	結果に対する気持ち	嬉しかった, 悲しかったなど情緒面の記述
	結果に対する肯定的評価	自分のためになった, いい思い出になったなど
	結果に対する否定的評価	後悔した, 二度とやりたくないなど
	記述なし	「結果についての記述」がない場合
プロセス	過程の記述	どのように努力をしたかに付いての記述
	手段の記述	単語帳を作った, 多くの人に呼びかけたなど
	努力中の気持ち	毎日苦しかった, 無我夢中だったなど
	過程に対する肯定的評価	効果的な方法だった, よくやったと思うなど
	過程に対する否定的評価	もっと集中してやるべきだったなど
	記述なし	「過程の記述」がない場合

2. 単純集計結果

3カ国の各グループの中で、カテゴリーに該当する内容について記述をした人数と比率についての集計を行った。また、カテゴリー内における回答者の比率の偏りがあるかについて検討するため、カイ二乗検定を行った。以上の結果を、記述内容と記述様式にわけ、表2、3に示した。

記述内容については、カイ二乗検定の結果、「活動内容」のカテゴリーの中で「学業」「アルバイト/仕事」「進路」「対人関係」で有意な差がみとめられた。「学業」についての言及は日本と中国で多く、米国では少なかった（中国 54%，日本 64%，米国 32%）。また、「アルバイト/仕事」については

各国とも多くはなかったがその中でも日本のサンプルで言及が少なかった（中国 17%，日本 4%，米国 18%）。「進路」についても各国とも言及は少なかったが，中でも中国は他の 2 国に比べると多かった（中国 16%，日本 1%，米国 2%）。「対人関係」については，比較的米国のサンプルで言及が多かった（中国 5%，日本 1%，米国 18%）。「クラブ活動／趣味」については，各国とも学業に次いで言及が多かったが，3 カ国間での差はなかった。

「誰のため」の категория の中では「家族のため」と「その他」で有意な差がみとめられた。「家族のため」という言及は各国とも多くはなかったが，中でも日本のサンプルで言及が少なかった（中国 10%，日本 2%，米国 8%）。また，3 カ国間で有意な差はなかったが，「自分のため」という言及が最も多かった（中国 92%，日本 89%，米国 72%）。

表 2. 記述内容の各カテゴリーへの回答者数と比率

カテゴリー		中国学生		日本学生		アメリカ学生		カイニ乗値
		N	83	244	60			
活動内容	学業	45	156	19	6.4			
		54%	64%	32%	*			
	アルバイト／仕事	14	10	11	15.9			
		17%	4%	18%	**			
	クラブ活動／趣味	10	49	16	3.4			
		12%	20%	27%	n. s.			
	進路	13	2	1	30.3			
		16%	1%	2%	**			
対人関係	4	3	11	26.4				
	5%	1%	18%	**				
身の回り／生活	2	10	6	4.3				
	2%	4%	10%	n. s.				
その他	3	4	1	1.1				
	4%	2%	2%	n. s.				
誰のため	自分	76	217	43	1.1			
		92%	89%	72%	n. s.			
	家族	8	6	5	7.6			
		10%	2%	8%	*			
	友人	1	1	1	1.2			
		1%	0%	2%	n. s.			
所属集団	1	22	5	5.1				
	1%	9%	8%	n. s.				
その他	4	1	12	36.5				
	5%	0%	20%	**				
何のため	達成／競争	30	185	13	23.7			
		36%	76%	22%	**			
	内発的	13	64	32	13.0			
		16%	26%	53%	**			
	義務／役割	9	18	7	1.3			
		11%	7%	12%	n. s.			
報酬／罰	36	17	11	37.9				
	43%	7%	18%	**				
その他	3	5	8	13.4				
	4%	2%	13%	**				

「何のため」の категорияの中では「達成／競争」「内発的」「報酬／罰」「その他」で有意な差がみとめられた。「達成／競争」では日本サンプルで言及が多かった（中国 36%，日本 76%，米国 22%）。

「内発的」では米国サンプルの言及が多かった（中国 16%，日本 26%，米国 53%）。「報酬／罰」では、中国サンプルの言及が多かった（中国 43%，日本 7%，米国 18%）。

次に記述様式について見ていくと、「目標」の категорияの中では、「明確な記述」「漠然とした記述」「記述なし」で有意な差がみとめられた。「明確な記述」では日本サンプルの言及が多かった（中国 49%，日本 80%，米国 32%）。漠然とした記述では中国サンプルの言及が多かった（中国 46%，日本 13%，米国 17%）。また「記述なし」は米国サンプルで特徴的であった（中国 5%，日本 3%，米国 52%）。

「結果」の categoriaの中では「結果についての記述」「結果に対する気持ち」「結果に対する肯定的評価」「記述なし」で有意差がみとめられた。「結果についての記述」では米国サンプルで記述が多かった（中国 29%，日本 23%，米国 68%）。「結果に対する気持ち」でも米国サンプルの記述が多かった（中国 17%，日本 15%，米国 53%）。「結果に対する肯定的評価」についても米国サンプルの記述が多かった（中国 7%，日本 12%，米国 38%）。逆に「記述なし」は日本と中国のサンプルで特徴的であった（中国 70%，日本 70%，米国 30%）。

表 3. 記述様式の各 categoryへの回答者数と比率

カテゴリー		中国学生	日本学生	アメリカ学生	カイニ乗値
N		83	244	60	
目標	明確な記述	41	196	19	14.6
		49%	80%	32%	**
	漠然とした記述	38	31	10	24.6
		46%	13%	17%	**
記述なし	4	7	31	77.3	
	5%	3%	52%	**	
結果	結果についての記述	24	57	41	19.6
		29%	23%	68%	**
	結果に対する気持ち	14	36	32	23.8
		17%	15%	53%	**
	結果に対する肯定的評価	6	30	23	19.6
		7%	12%	38%	**
結果に対する否定的評価	1	8	1	1.2	
	1%	3%	2%	n. s.	
記述なし	58	172	18	9.5	
	70%	70%	30%	**	
プロセス	過程の記述	83	217	39	2.8
		100%	89%	65%	n. s.
	手段の記述	81	152	19	14.8
		98%	62%	32%	**
	努力中の気持ち	70	187	26	6.0
		84%	77%	43%	*
	過程に対する肯定的評価	31	50	9	7.3
		37%	20%	15%	*
過程に対する否定的評価	3	11	2	0.2	
	4%	5%	3%	n. s.	
記述なし	0	16	21	40.1	
	0%	7%	35%	**	

「プロセス」のカテゴリーの中では、「手段の記述」「努力中の気持ち」「過程に対する肯定的評価」「記述なし」で有意な差がみとめられた。「手段の記述」では中国サンプルで記述が多く、米国サンプルで記述が少なかった（中国 98%，日本 68%，米国 32%）。「努力中の気持ち」では米国サンプルの記述が少なかった（中国 84%，日本 77%，米国 43%）。「過程に対する肯定的評価」でも中国サンプルの記述が多く、米国サンプルの記述が少なかった（中国 37%，日本 20%，米国 15%）。「記述なし」は米国サンプルで特徴的であった（中国 0%，日本 7%，米国 35%）。

3. 数量化 III 類による分析の結果

3カ国の記述の特徴を比較するために、数量化 III 類を用いた分析を行った。まず、「努力したこと」の内容について記述された「活動内容」「誰のため」「何のため」の3つのカテゴリーを「記述された内容の特徴」として同時に分析した。「記述された内容の特徴」では、努力が「誰のため」であったかという軸（自分のため-他者のため）と、努力が「何のため」であったかという軸（内発的-外発的）で説明することが適当と考えられた。この2軸を使って各カテゴリーの下位項目と3カ国の関係性を図1に示した。

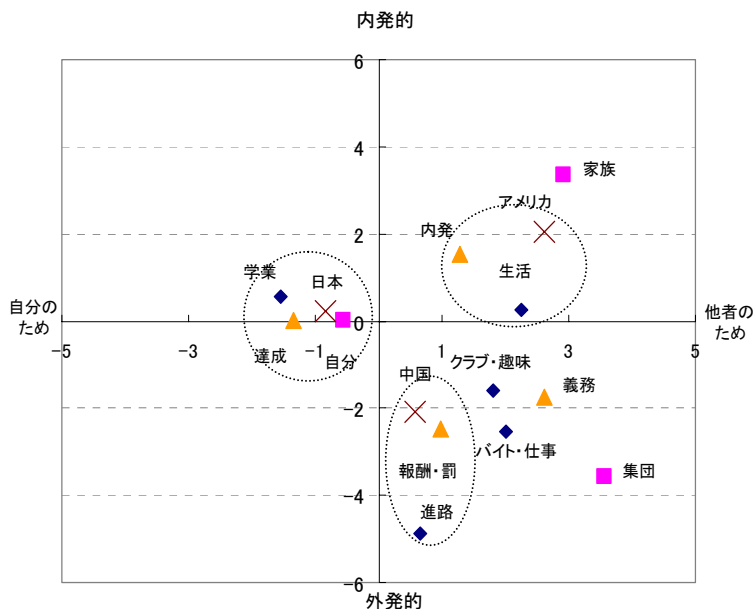


図1. 「努力したこと」記述された内容：日米中比較

次に、「努力したこと」の記述をする際の焦点の当て方に関する表現様式を分類した「目標」「結果」「プロセス」の3つのカテゴリーを「記述様式の特徴」として同時に分析した。「記述様式の特徴」では、「結果」の記述のしかた（結果の記述あり-結果の記述なし）と「プロセス」の記述のしかた（プロセスの記述あり-プロセスの記述なし）という軸で説明することが適当と考えられた。この2軸を使って、各カテゴリーの下位項目と3カ国の関係性を図2に示した。

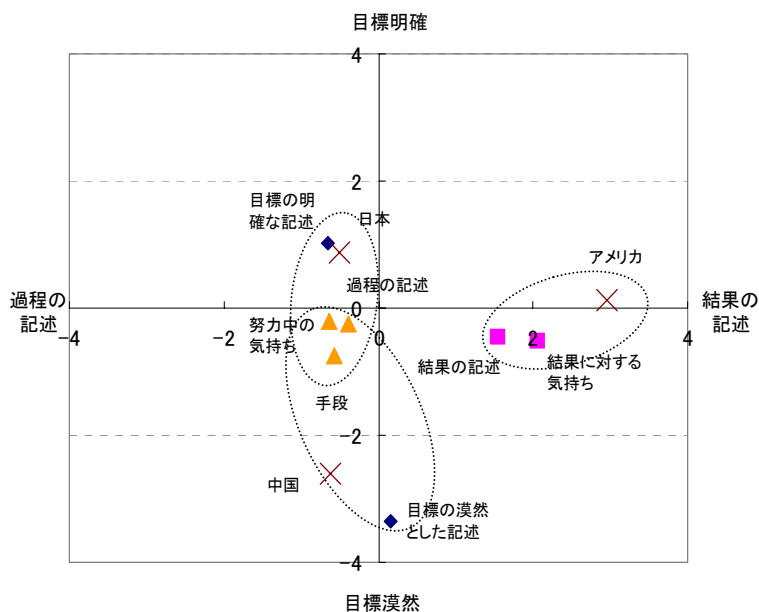


図2. 「努力したこと」記述の様式:日米中比較

「記述された内容」の特徴として、日本サンプルでは、「学業」の「達成」を目指して「自分のため」に努力したとする記述の特徴がみられた。中国サンプルについては、「進路」に関して「報酬・罰」を得る／避ける目的で努力したとする記述の特徴がみられた。米国サンプルでは、「身の回り／生活」に関して「内発的」に努力したとする記述の特徴がみられた。

「記述の様式」の特徴として、日本サンプルでは「目標の明確な記述」と「過程の記述」「努力中の気持ち」などのプロセスに関する記述が特徴的であり、中国サンプルでは「目標の漠然とした記述」と「手段」「努力中の気持ち」などプロセスに関する記述が特徴的であった。米国サンプルでは「結果の記述」「結果に対する気持ち」の記述が特徴的であった。

考 察

本研究では「努力したこと」についての自由記述のスキプトの特徴について、日米中の3カ国比較をすることで、文化におけるスキプトの特徴を相対的に明らかにすることを目的とした。

まず、努力したこととして記述された内容の「活動内容」については、日本や中国では「学業」が多く記述され、米国では「対人関係」や「身の回り／生活」についての記述が多かった。さらに中国では「進路」についての記述が多かった。また「何のため」に努力したのかという動機づけについては、日本では「達成／競争」のため、中国では「報酬／罰」のため、米国では「内発的」動機づけのためと、それぞれ特徴を示した。このような特徴の差は、学生という社会的な立場が同じであるにもかかわらず、その文化において努力に値すると判断する内容が異なっていることを示していると考え

られる。一方で記述された内容の共通点もあった。「誰のため」に努力したかについての記述は、3カ国とも「自分」のためが最も多く、3カ国間で差はみられなかった。

また、努力したことを記述する際の焦点の当て方に関する記述様式については、日本では目標を「明確に」記述することが特徴であり、中国では「プロセス」を詳細に記述するという特徴があり、米国では「結果」についての記述が必須の情報として捉えられていることがわかった。

数量化 III 類の分析結果からも、3カ国それぞれの相違点について明らかになった。特に「努力したこと」の記述の内容に関しては、3カ国で独自の特徴を有しており、大学生がおかれたそれぞれの社会的状況の違いを反映しているものと考えられた。

一方で、記述様式についての数量化 III 類の分析結果からは、日本と中国で特徴が重なる部分があるが、米国は日中とは異なる独自の特徴を示すことがわかった。記述の様式については、日中の学生と親世代の比較をした分析（高崎ら、2006）でも類似していることが示されており、アジア文化圏における「努力」スクリプトに共通点があることが示された。

以上のことから、社会や文化からの影響を受けて、個人のスクリプトが形成されるとしても、比較的短期的な社会状況に影響を受ける側面と、長い期間かけて受け継がれた価値観に影響を受ける側面があることが示唆された。たとえば、同じ大学生でも、経済発展の著しい社会状況にある中国と、個人の生き方を重視する社会状況の強まっている日本とでは、努力するに値する行為が異なっているのだと考えられる。一方で、他者に対して自分の「努力」を表現する際に、「過程」に関する情報をより重視するという特徴は、短期的な社会の状況を超えたものとして、日中双方に共有されていると考えられる。

日米中の3カ国比較と、日中2世代の比較研究を総合して考察すると、文化とは単に国単位で分節できるものではなく、地域・世代・歴史などの複数の要素がからまって個人に影響を与えるものだといえるだろう。また、各要素は、スクリプトの異なる側面に影響を与えるものであるといえるだろう。しかしあらゆる要素の組み合わせを考えると、個々人全てが異なる条件を有しており、文化はとらえどころのないものになってしまう。このため研究上は目的に合わせて、便宜的にいずれかの要素を選択して、文化として定義する必要があると考えられる。

引用文献

- 東洋 1997 日本人の道德意識 道德スクリプトの日米比較. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編). 文化心理学 理論と実証. 東京大学出版.
- 東洋 1999 文化心理学の方法をめぐって—媒介概念としての文化的スクリプト—. 発達研究, 14, 113-120.
- 高崎文子・東洋 2006 「努力したこと」についての回想的記述の分析：日中比較 発達研究, 20, 55-65.
- 真島真理・Shapiro,L., 東洋 1998 作文課題による目標構造と将来展望に関する研究—「目的を持って努力したこと」の日米比較 (中間報告) 発達研究, 13, 106-108.

<付 記>

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 基盤 (B)「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」(課題番号：17330137；研究代表者：東洋)の助成、および(財)発達科学研究教育センターの研究委託を受けて実施された。

本研究で用いられたデータは、日米中の各調査の責任者である東洋先生に了解を得た上で、再分析に用いられたものである。